

「口腔がん」の早期発見について

旭川赤十字病院 歯科口腔外科 診療副部長 嶋津 真史

高齢化社会を迎える中、現在の日本国民の死因は「脳血管障害」や「心疾患」を抜いて「がん」が第1位となりました。「がん」は体のいずれの部位にも発生しますので、口腔にも発生することがあります。口腔にできた「がん」の総称を「口腔がん」と言いますが、その発生率は1～3%程度と決して多くはないためあまり聞き慣れないかもしれません。しかし、口腔は会話をしたり食事をしたりする際の非常に重要な臓器ですので、ひとたび「がん」に侵されると、時にはこれらの機能に大きな障害を残したり、顔の審美性が損なわれることがあります。そして最悪の場合は生命の危機にまで至ります。

一口に「口腔がん」と言っても、最も発生率の高い「舌がん」をはじめ、発生する部位により「上下歯肉がん」、「頬粘膜がん」、「口腔底がん」、「硬口蓋がん（上あごのがん）」、「口唇がん」とに分類され、その全体の5年生存率は約50～80%程度とされています。しかし、口腔がんも他のがんと同様、発見された時期が早期であればあるほどその治療成績は良好で、5年生存率が90%前後という施設もあります。そして早期に治療ができるほど術後の機能障害も少なく済みます。

治療方法としては外科的切除、放射線治療、抗がん剤治療が代表的ですが、多くの場合で入院治療が必要となり、その期間も数週～数ヶ月と様々です。さらに退院できても、失われた機能がある程度回復するまでにさらに数ヶ月を要することもあり、これらを最大限避けるためには早期発見、早期治療が非常に重要なカギとなります。早期発見のためには「口腔がん」の症状を知ることが重要で、主な症状としては腫瘍（できもの、腫れもの）、潰瘍（組織のただれや内部への掘れ込み）やそれに加えて出血や痛み、口の開きづらさなどです。時として初めに口腔内の変化ではなく首のできもの（リンパ節の腫れ）を初発症状として自覚することもあります。口腔は体表に近い部分であり自分で見るができます。大切なのは日頃からご自身の口腔内チェックと、何か異常を感じたときには早く歯科を受診する、加えてかかりつけ歯科医院での定期的な検診が大事に至らない秘訣ではないでしょうか。

進行した舌癌の写真



左の舌縁にできた潰瘍（前方にも病変あり）



手術で舌1/2切除を行い、腕の皮膚で舌を再建